



六十軒」——中世のにぎわい——

皆さま、長期不安のなかで新年をお迎えのことと存じます。さらに一層のご留意をお祈りいたします。

さて、「筑波千軒・小田千軒・北条三百六十軒」。この呪文のような言葉は、昭和30年代、私が小・中学生の頃に皆が口にし、心得ている筑波山周辺での俚言(特定地域の寸言)です。これは筑波、小田、北条地区のにぎわいを指す言葉です。いまだにその由来・発生の背景は私には分かりませんが、皆さまはご存じですか。

「筑波」は江戸時代に「町」を称した筑波山知足院中禅寺の門前町、小田は言わずとも知られた小田氏の城下町、北条は佐竹・真壁・多賀谷連合軍による小田城攻略のための兵站基地(へいたん)でもあり、いずれも人々が集住する理由がありました。

筑波山は、古代から信仰の霊地として、中世・近世には坂東観音霊場巡礼の第25番としてにぎわいました。

小田城は、初代常陸国守護八田知家流小田氏の居城として戦国時代までには国内有数の大城郭となりました。そして、北条は、この小田城攻略のための周到な戦線の要所となりました。北条(宿)に今も残る虎口(道路の折れ曲がり)こそ、小田城攻略の基地にふさわしい規模の軍事遺構です。この基地の発展が江戸時代の「在郷商人町」北条(宿)の姿です。これらのことがあるいは俚言の発生源かも知れません。

小田城下の戦国期のにぎわいを伝える興味深い資料があります。市内高岡地区にある法雲寺が所蔵する「小田氏治肖像画」(茨城県指定文化財)に添えられた「賛」(下野国那須雲巖寺中興大虫宗岑筆。天正16(1588)年)です。小田城主小田氏治の寿像(じゆざう)に対して贈った賛ですが、この文言中に、「(小田の城下は)香車玉輦(こうしやぎよくれん)など立派な車がガタガタとひっきりなしに宮城に入るがごとく、また、大晦日の鬼遣(おにや)らの行事で、きらびやかな衣裳をまとった人々が、奇声を発し物の怪(ものけ)や禍(わざ)を祓(はら)っているがごときのにぎわいであつた」とあります。武家の町とはいえ、商人・職人も居住し、周辺の農民の出入りのみならず、外来の芸能者・宗教者も混在したであろうと思わ

糸賀 茂男

土浦市立博物館館長
上高津貝塚ふるさと歴史の広場館長
常磐大学 名誉教授



新春 博物館館長が語る

「筑波千軒・小田千軒・北条三百

れます。〃軒数はまさににぎわいの様子を伝えるバロメーターなのです。栄枯盛衰とは歴史の習いと言われますが、改めて筑波山麓の〃にぎわい〃に思いを馳せてみてはいかがでしょうか。

そして、今春の市立博物館で行われる第43回特別展示は「八田知家と名門常陸小田氏」です。県内で初めての小田氏の総合展示となります。鎌倉殿と八田氏・小田氏、南北朝内乱、室町内乱期、戦国動乱期、江戸期、各時代を通しての小田氏の世界感を感じてください。

では、私の年頭の所感です。

もののふの腰の下げ緒のこむらさき

すはまの草の花のうつし絵



「小田氏治像」法雲寺蔵 茨城県指定文化財



洲浜紋

小田氏・穴戸氏およびその一族の家紋。縁起物である蓬萊山を州浜に見立て、図案化したもの。



六洲浜

洲浜紋の変形。足長洲浜とも呼ばれる。漢数字の「六」の形状を表している。